ました。この運動によって食事も大へんおいしくなりました。

こうして七度、伊勢詣りをした甚助は健康で牢屋を出ることができました。そして熊川の遍照寺で仏に仕え、余生を安楽に送りました。

《第五話》

## 百姓三太郎（下野上）

三太郎はこの地に来てまだ三年しかたっていない百姓である。荒れた田を開いたが水は思うようにかからない。隣の田にはいつも一ぱい入っている。それは士、吉田五左エ門の田である。三太郎がたんぼに出ると五左エ門の居候がすぐとんでくる。しかたなく三太郎は真夜中に起きて水をかけるのだが、あまり水は入らなかった。

今年はひでりで五左エ門の田にも水は一ぱい入っていなかった。三太郎はなるべく人にあわないようにして水かけをしていた。夕方であった。五左エ門が三太郎の家を訪ねて来た。

「三太はいたか。」